

読売歌壇

老人となりたる兄とわたくしと墓参の帰り手つなきあゝ

【評】老境の兄と妹が手をつなぐ。墓参の帰りである。これは仲良しというこよもも、転ばぬように互いに助け合っているのだから。味わい深い光景だ。

差じらいの古いの口紅うすく引く十一月のある晴れた日

【評】作者九十五歳という。きょうは秋晴れのよい日になった。思わず、古いのくちびるにあやかな紅を差す。おもむき深い場面である。下句がこころにも簡潔でよい。

露天風呂今年生まれの赤ちゃんも怖く入るカピバラ一家

【評】お猿やカピバラは寒くならずと好んで温泉にひたる。人間くさくて、万人これを好む。赤ちゃんのカピバラなればなおさら。

とおき目のわがが聞きだるとらつぐみの声をさびしく時におもひぬ

【評】おき目のわがが聞きだるとらつぐみの声をさびしく時におもひぬ。道渡る尺取り虫よあと少し畑に着けばなんとかなるよ。

新聞にガザの惨状その右に全面カラーのおせちの広告

【評】おせちの運動会を下に見て。鶴と鳥の対決続く小学校の運動会を下に見て。鶴と鳥の対決続く。

いつ寝てもいいよと自分に言いかけらラジオと灯を消し眼鏡を外す

【評】二十枚年賀はがきを買いましたあの人の人笑顔をうかがふ。

顔がうかがふ

【評】二十枚年賀はがきを買いましたあの人の人笑顔をうかがふ。

十個入りパックのなかの生たまごの画を時

【評】十個入りパックのなかの生たまごの画を時

かななしむ

小池 光選

紙の本と呼ばれる本が行儀良く棚に並んで呼吸続ける

【評】かつては本と言えは紙に決まっていたが、電子書籍が増えた昨今ではあえて「紙の本」と呼ばねばならない。結句に紙の本への愛着が表れており、共感を覚えた。

四年ぶりに帰国を果たした姪っ子が爆買いをする「安いニッポン」

【評】円安の日本を「安いニッポン」と表したところに自虐めいた気分が漂う。四年ぶりに帰った姪の目に日本はどう映っているのだろう。じっくりと尋ねたい気がする。

抱擁に不安を溶かすあたたかみ感じて移る車椅子へ

【評】抱きかかえられて車椅子へと移るとき甘美な気持ちになった。人の身のあたたかさや不安を溶かすのだ。しらべの美しい歌。

反撃も攻撃も同じ弱者から死んでゆくのだ戦争よNO!

【評】心からお詫びしますが多すぎるそんな心は軽くなりしか。ジャックにはなれぬ私と豆の木になれぬ豆苗窓辺で語る。

浄土にも祝ぶファンたち多からん虎日本一三十八年ぶり

【評】広き田のその一角に繋かれし黒牛静か秋の真昼間。身ぶるいをするがごとくに枯葉落ち再起を誓う。リハビリ選手。

【評】網棚に網が張られていたことを知らぬ子と行く。鉄道博物館。

栗木 京子選

きび団子ひとつで命預けたる童話のような社員はおらぬ

【評】桃太郎のお話は、あくまでフィクションだ。牧歌的な昔話のようなことが現実起こっているとしたら、笑えない。食うことは大事だが、それよりも命。悲しく首を振るような結句に、静かな怒りがにじむ。

目的地付近で黙るカーナビと、さざなみ、きみの呼吸、さざなみ

【評】急に寡黙になったカーナビのせい、君の息づかいが意識されたのだろう。静けさゆえのドキドキが、まさに漣のように伝わる。ずっと世界の入り口に立ちつくしててりんごに代わるお金を知らない。

【評】この世のルールや暗黙の了解みたいなものへの違和感を表明した歌と読んだ。実体的あるりんごは、記号としてのお金とは違つ。静電気起りやすくて蚊に刺されやすくて道を聞かれやすくて。

【評】役割を終えたS.A.L.Eの看板とバックヤードを分け合いねむる。

【評】ポケットにどんぐりが入っていることもなく。洗う夫のジャンパー。

【評】君と手をつないでごはんを食べるためわたしは左利きに生まれた。

【評】紅葉を表す言葉が無い国の大通り飾る赤の葉黄の葉。

【評】やや満足・満足・とても満足のどれが私の満足だろう。

【評】苦情聴くわたしポスター貼るわたしわたしはいつも同じ時給で。

俵 万智選

野や山に埋もれ生きる世のまこと薬研を前に語らいし祖母

【評】生葉をすりつぶす器具である薬研を大切にしていた祖母。野山で薬効ある植物を採取していたのだろう。そんな生き方もあった昔を思う作者。「薬研」の具体性が良い。

人生が祭りのようなものならば最後は篠笛一本でいい

【評】派手な鉦や太鼓の祭り囃子もよいが、哀愁ある篠笛の響きも心に沁みる。そんな老いの日々を送りたいという願い。とはいえず、なかなかそうはならないのも現実です。

採る人も盗る子らもなく庭一面熟して落ちる空き家の柿が

【評】今では、先を争って柿を摘んでゆく子どももいない。熊を呼ぶとかで厄介者扱いされるもする柿。柿好きの身には少しさみしい。

【評】この世にはもう入道とう言葉なし赤子が生きる術すら断たれる。

【評】いかほどを食べれば熊は眠れるや拾いしどんぐりまじまじと見る。

【評】懸命に捻らんとする櫓田へトラクター入るあかねさす昼。

【評】もみちにはまだ早かりし二尊院正午告げの梵鐘風に乗る来る。

【評】敷ゆけば敷敷がわれを襲い来て老ゆれどまだまだ鮮血あるや。

【評】長男を入社試験へ送る道「緊張してきた」(そらだろ俺も)。

【評】あと三十分あればひこにゃんに会えたのに団体旅行は非情に発車す。

黒瀬 珂瀾選

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから ◇次回は18日(月)に掲載 右の影絵はくちなしのみ